

大学院共通科目「研究者のための論文作成」 —コース報告および今後の課題—

金山 泰子、田中 和美

1. はじめに

国際基督教大学における「研究者のための論文作成」コースは、2010年に開設された大学院共通科目の一つであり、大学院生を対象に論文作成法を指導するコースである。毎年秋学期に開講されており、日本語教育プログラム（Japanese Language Programs 以下 JLP）の主任がコースコーディネーターとなり、JLP 教員と共に指導を担当している。本稿では、2016年度のコース概要を報告し、コースの問題点や意義を明らかにすると共に、今後の課題について検討する。

2. コース概要

2-1. コースの目標

本コースは、毎年秋学期に開講される大学院生を対象としたコースで、日本語による論文の書き方の習得を目指すものである。学術論文の書き方は研究領域や分野で異なる点があるが、本コースではそれぞれの専門分野の代表的な学術論文のフォーマットおよびスタイルを含め、学術論文の基本的な構成を検討する。その後、特定の主題を選び、実際に論文を書きながら訂正・修正・削除・加筆などの指導を受け、よりよい論文の書き方を学ぶ。具体的には、以下を目標とする。

- 1) 専門分野の学術論文の分析を通して、論文の構成が理解できる。
- 2) 適切で、正確な言語形式が使用できる。
- 3) 読み手に分かるように、筋を立て、論を運ぶことができる。
- 4) 学術論文の執筆要領が理解できる。

2-2. 評価

コースの最終目標は成果物として8000字程度の小論文を執筆提出することであるが、評価の対象はレポートの最終稿のみではなく、完成に至るまでのプロセスにおける課題の提出状況や発表なども含まれる。具体的な評価の内訳は以下の通りである。

① 小論文（全体成績の50%）

- ・ 字数：8000字程度
- ・ 提出形態：最終原稿及びその執筆過程をポートフォリオとして提出。ポートフォリオに含まれるものは、構想マップ、目標規定文、アウトライン、ポスター発表資料、第1稿、第2稿、プレゼンテーション原稿、最終原稿2部、専門分野のモデルとした代表的論文である。

- ・ テーマ：各自の分野における課題、グローバル化という視点を含めること
- ・ 対象：その分野に興味、素地がある大学生以上の教養人
- ・ 小論文（8000字）執筆の過程における締め切り日は以下の通り

1	目標規定文、概要	9月21日
2	ポスター発表	10月5日
3	第1稿	10月14日
4	第2稿	11月4日
5	最終稿	11月15日16時

② 課題（40%）

- ・ 該当分野の論文収集、学術誌の執筆要領調査
- ・ 目標規定文提出、ポスター発表
- ・ 最終論文のプレゼンテーション
- ・ 授業内作文、パラグラフ・ライティングなど

③ 平常点（10%） 授業への参加度など。

なお、小論文、および発表の評価基準は以下の通りである。

① 小論文

- ・ 内容 説得力：目標を達成しているか、論理の展開、一貫性、情報収集、情報の吟味
明晰さ：事実と意見の区別、客観的な理由、根拠の有無と妥当性
- ・ 言語：論文として適切で正確な文、語句、文体；つながり、多義性がない
- ・ 全体：読みやすさ、構成、レイアウト；執筆基準遵守、参考文献リスト

② 発表：態度、話し方、時間配分、わかりやすさ、説得力、興味を引く工夫

2-3. 履修学生

本コースは大学院共通科目となっており、博士課程前期（修士課程）に在籍する学生及び5年プログラム候補生が履修対象となる。5年プログラムとは、大学入学から修士号取得までを5年で修了するプログラムであり、本コース履修時点では学部4年生である。また十分な日本語運用能力があれば日本人学生のみならず、留学生、帰国生も履修が可能である。2016年度の履修者の内訳を見ると、14名のうち1名は留学生であった。学年別に見ると、修士課程2年目の学生が4名、1年目の学生が7名、5年プログラム生が3名であった。次に履修者を専攻別に見ていくと、比較文化専攻6名、心理・教育学専攻4名、公共政策・社会研究専攻3名、理学専攻1名であった。さらに専攻テーマ別に細かく見ると、教育学専修3名、言語教育専修1名、日本文化研究専修3名（歴史2名、哲学1名）、超学域文化研究専修3名（アメリカ史1名、イギリス史1名、アメリカ文学1名）、社会文化分析専修1名、公共経済学専修1名、平和研究専修1名、生命科学専修1名であり、多様な分野、背景を持った学生たちが履修していた。

2-4. スケジュール

1 週 2 コマ (1 コマ 70 分) に加え、時間外に個別指導が週 1 コマ設置されている。
 2016 年度のスケジュールを以下に示す。

表 1：授業スケジュール

	月日	内容	次回までの課題
①	9 月 7 日 (水)	コース説明 論文とは / 論文の構成とは ■授業内作文 各自の分野、研究課題	自分の分野での代表的な論文を収集し、次回持参する。代表的学会誌の投稿規程コピーも準備する。テーマについて考えてくる。
②	9 月 14 日 (水)	分野別の論文の検討 構想マップ作成、目標規定文について テーマの絞り込み ピア活動⇒授業内個別指導 ■授業内作文	目標規定文の作成
③	9 月 21 日 (水)	パラグラフ・ライティングとは 目標規定文検討 ピア活動⇒授業内個別指導 ■授業内作文	アウトラインの作成
④	9 月 28 日 (水)	ポスター発表とは アウトライン検討 ピア活動⇒授業内個別指導 ■授業内作文	ポスター発表準備
⑤	10 月 5 日 (水)	概要のポスター発表	序論を書く
⑥	10 月 12 日 (水)	序論検討 参考文献、引用 (執筆基準参照) ピア活動⇒授業内個別指導	第 1 稿提出
⑦	10 月 19 日 (水)	要約、レジюме、プレゼンテーション、 文章の点検について 個別指導：第 1 稿	
⑧	10 月 26 日 (水)	論文プレゼンテーション 10 分発表 + Q&A 10 分 x 7 人 = 140 分	
⑨	11 月 2 日 (水)	論文プレゼンテーション 10 分発表 + Q&A 10 分 x 7 人 = 140 分	第 2 稿提出
⑩	11 月 9 日 (水)	個別指導：第 2 稿	最終原稿をポートフォリオとして提出 (11 月 15 日)

2-5. 授業形態および授業の流れ

本コースの授業形態は、一斉講義の他、小グループに分かれたピア・リーディング活動、個別指導である。ただし教員主導による講義は最小限にとどめ、極力学生が主体的に学べるタスクを課し、クラスメートとのピア・リーディング活動および個別指導を通して学びながらレポートを書き進められるようにコースを設計してある。教員主導で行った授業はコース前半の第1～3回で、論文の構成と構成要素、およびパラグラフ・ライティングについて導入・演習を行った。第4回目以降は、上記スケジュールに沿ってアウトライン、序論、第1稿、第2稿と書き進め、それぞれの段階でクラスメートとお互いに書いたものを読み合うピア・リーディング活動、および教師による個別指導を行った。またコース中間にあたる第5回目には、レポートの概要についてのポスター発表を実施し、さらに第8、9回目では2回にわたって論文の口頭発表を行った。以下では授業の流れを紹介する。

2-5-1. 論文の構成と構成要素

本コースの履修学生はそれぞれ分野が異なるため、執筆するレポートの型、構成も様々ではない。そこで本コースの第1回目では、二通他（2009）に従い、「検証型論文」「複合型論文」「論証型論文[文献解釈系]」「論証型論文[論説系]」という4つの構成例を示し、それぞれの節に含まれる要素を確認させた（資料1）。

また、次週までの課題として、自分の分野における代表的な論文を収集し次回のクラスに持参すること、代表的学会誌の投稿規程コピーを準備すること、本コースで執筆するレポートテーマについて考えてくることを課した。

第2回目は、各自持参した論文が、前週紹介した論文の型のうちどれに該当するか、全体的な構成として、「序論」「本論」「むすび・まとめ」に相当する部分はどこかを検討させた。さらに論文の構成要素（背景、問題、問題提起・主張、目的、方法・手段、先行研究、根拠／論証（データ）、考察（反論／支持／意見、結論、提言）に相当する部分にハイライトさせ、それぞれの構成要素において、その論文独特の表現の特徴があるかを検討させた。また、代表的学会誌の投稿基準、執筆基準についても確認させた。これらの作業を個別に行った上で、クラスメートとのピアワークを通じて、分野によってどのように構成要素が異なり、自分の分野ではどのような特徴があるかを認識させた。学生達はここで選んだ論文をモデルにして、以後、目標規定文、アウトライン、序論の執筆から始まり最終稿を仕上げていくことになる。

2-5-2. パラグラフ・ライティング

第3回目では、「パラグラフ・ライティング」の導入と演習を行った。「パラグラフ・ライティング」とは、トピックセンテンス、サポーティングセンテンス、コンクルーディングセンテンスの3つの基本構成単位によって文章を構築するライティング技術である（泉2009）。本コースの履修者は全員が大学院生であるため、これまでの大学生活の中で初年次教育などを含め、どこかで必ず「パラグラフ・ライティング」について学んできたことが予想される。しかし本コースの目標の一つである「読み手に分かるように、

筋を立て、論を運ぶことができる」ようになることを達成するために、あらためて「パラグラフ・ライティング」を導入し、演習を行った。演習では、文章の中から「トピックセンテンス」「コンクルーディングセンテンス」を抜き出す練習、さらに、悪例の問題点を指摘する練習をピアワークで行った。さらに、「国際人とは」「大学で学ぶこと」「グローバル化とは」のいずれかのトピック 30 分以内で 400 字のパラグラフ・ライティングを書かせ、クラスメートとのピアワークを経てリライトした上で提出させた。

2-5-3: 目標規定文、アウトライン、序論、第 1 稿、第 2 稿執筆までの流れ

第 3 回目以降は、学生が自ら決定したトピックについて、モデル論文を参考にしながら、スケジュールに沿って、目標規定文、アウトライン、序論と執筆を進めていった。学生は各自が書いてきたものについて、まずクラスメートとのピア・リーディング活動を通じて、お互いに質問や意見を交換し合う。上記 2-3 でも述べたように、本コースの履修学生の専攻分野は多岐にわたっている。それぞれ異分野の視点から客観的な質問・意見を受けることによって、内省を深め、客観視させることが狙いである。パートナーを数回変えてピア・リーディングを行った後にリライトしたものについて、さらに教師の個別指導を受けるという流れで進めた。第 1 稿、第 2 稿については学生同士のピア・リーディング活動は行わず、各学生 20 分ずつ教師との個別指導を実施した。

2-5-4. ポスター発表とプレゼンテーション

本コースの中間時期にあたる第 5 回目にポスター発表、最終時期にあたる第 7、8 回目には口頭によるプレゼンテーションを行った。この活動の目的は、発表そのものや聴衆との質疑応答を通じて最終成果である論文の内容・質を深めることである。さらに「学会」の雰囲気を疑似体験することによって、研究者を目指す大学院生が研究者としての意識を高めるという意味でも意義があると思われる。ポスター発表では、各自が準備してきた資料を壁に提示し、各学生が発表をそれぞれ 2 回繰り返して行い、さらに聴衆として 4 人のポスター発表を聞けるように時間を設定した。プレゼンテーションでは、質疑応答を含め 20 分の持ち時間で発表を行った。教員が司会進行とタイムマネジメントを務め、フォーマルな雰囲気を作るように心がけた。

2-5-5. 授業内作文

コース前半 4 回において、400 字原稿用紙 1 枚程度の授業内作文を課した。普段使い慣れていない原稿用紙に手書きすること、制限字数内で時間内にまとめることを課し、書くことに慣れさせた。「自分の研究テーマを選んだ理由」「国際人とは」「大学で学ぶこと」「グローバル化とは」などのテーマについて書かせたほか、文章の要約を行った。論文指導の中では内容・構成・文体などの指導が中心となり、細かい文法・語彙表現の誤りなどが指摘しきれない。そこで 400 字程度のまとまった文を書かせ、基本的な言語面での誤りを指導した。本コース受講者はほとんどが日本語母語話者であったが、主述不一致、長すぎる文、重複文、口語の使用、連体修飾の長すぎる文、不適切な接続詞の使用などが散見された。

3. まとめと課題

以上、本コースの概要について述べてきた。本コースの最大の特徴は、研究分野、学年など背景の異なる大学院生が混在している点であり、それがコース存在の意義であると同時にいくつかの問題点も内在していると思われる。以下ではそれらについて振り返りつつ、今後の課題についても検討する。

3-1. ピア・リーディング活動の意義

各自の書いたものを異分野の学生と読み合うというピア・リーディング活動を通じて、内省・客観化し、学際的な視野を深化させ、新たなテーマを再発見する契機となり得るという点は、本コースの大きな存在意義であると思われる。池田（2007）は Ferris & Hedgcock が提唱する ESL におけるピア・レスポンスの利点について以下のようにまとめている。

- 1) 学習に積極的に参加できる
- 2) 仲間から与えられる刺激によって自分の考えが整理できる
- 3) 学習者同士、または教師と学習者との緊張の低い話し合いの中で、創発ができる
- 4) 書き手は実際の読み手からのフィードバックが得られる
- 5) 多様な視点からのフィードバックが得られる
- 6) 書き手は読み手が理解できたところや不明確な部分について知ることができる
- 7) 仲間の文章を分析したり修正したりするために必要な批判的スキルを向上することができる
- 8) 仲間の弱い面や優れた面を分かり合うことで、互いに信頼を高めることができる

以上は ESL における利点について述べており、全く同じ状況とは言えないが、本コースでも同様の効果が見られた。コース開始時は緊張感もあってかあまり活発な意見交換が見られなかったが、コースが進むにつれ活動が円滑化・活発化していく様子が見られた。さまざまな異なる分野の学生が混在しているからこそ、得られる意義であると思われる。

3-2. 修士課程学生と5年プログラム生の混在

現在、本コースは毎年秋学期にのみ開講されている。上記 2-3 でも述べたように、本コースには修士課程学生と5年プログラム生が混在しており、修士論文提出までの時間から逆算すると、修士課程の学生は1年目の秋学期、5年プログラム生は4年目の秋学期に、本コースを履修することが多い。

表 2：修士課程学生の本コース履修例

1 年目：春学期	→	秋学期（本コース履修）	→	冬学期
2 年目：春学期	→	秋学期	→	冬学期（修士論文提出1月）

表 3：5 年プログラム学生の本コース履修例

4 年目：春学期 → 秋学期（本コース履修） → 冬学期（卒業論文提出 2 月）
5 年目：春学期 → 秋学期 → 冬学期（修士論文提出 1 月）

修士課程学生のほとんどは、本コースを履修するまでに既に学部の卒業論文を書いた経験があり、修士論文のテーマもほぼ決まっている。それに対し、5 年プログラム生は学部の卒業論文を念頭に置きつつ本コースを履修している状況である。まとまった量と質を求められる論文執筆の経験がないところに加え、卒業論文執筆と平行して本コースを履修しなければならない。卒業論文執筆とのバランス（時間、テーマ、労力）の問題や、論文テーマを吟味しきれていないこと、書き方にも慣れていないことなど問題が多く、なかなか筆が進まないというのが 5 年プログラム生の実情であった。彼らが修士課程学生と共に本コースを履修することにより学ぶことが多いのは利点であるが、一方で、彼らには修士課程学生以上に支援が必要であると思われる。

3-3. 日本語教師・日本語教育の役割

最後に、本コースに JLP 教員が関わっていることに関連して、日本語教師の役割、日本語教育の今後について言及しておきたい。日本語教師は、これまで留学生を対象とした第二言語としての日本語教育、継承語母語話者（帰国生、国内外インターナショナルスクール卒業生）を対象とした日本語教育がその役割と考えられてきた。しかしながら近年、大学における初年次教育の一環として、レポートや論文の書き方を指導する科目を設置する大学が増えてきており（成田他 2014）、そうした流れの中であって、留学生のみならず日本人学生の日本語能力育成が日本語教師に求められるようになってきた。殊に本コースのように大学院生のための論文作成指導に関わることは、大学における日本語教師・日本語教育に新しい役割が課せられているのではないかと考える。第二言語としての語学教育という枠を超えて、大学・大学院における日本語教育とは何か、日本語教師ができることは何かを再考する必要があるのではないだろうか。

その一つは言語面での指導である。本コースの履修者はほとんどが日本語母語話者ではあるが、前述したように、主述不一致、長すぎる文、重複文、口語の使用、連体修飾の長すぎる文、不適切な接続詞の使用などが散見された。論文指導においては、内容、構成、論理的展開などの指導が重んじられるが、本コースに日本語教師が関わっている以上は、基本的な日本語能力そのものの向上にも貢献したい。

さらに、実際に学位論文指導にあたる指導教官との連携も視野に入れ、専門教育との関わりにおいて、日本語教師が担うべき役割、これからの日本語教師に求められるものを検討していく必要があると思われる。

参考文献

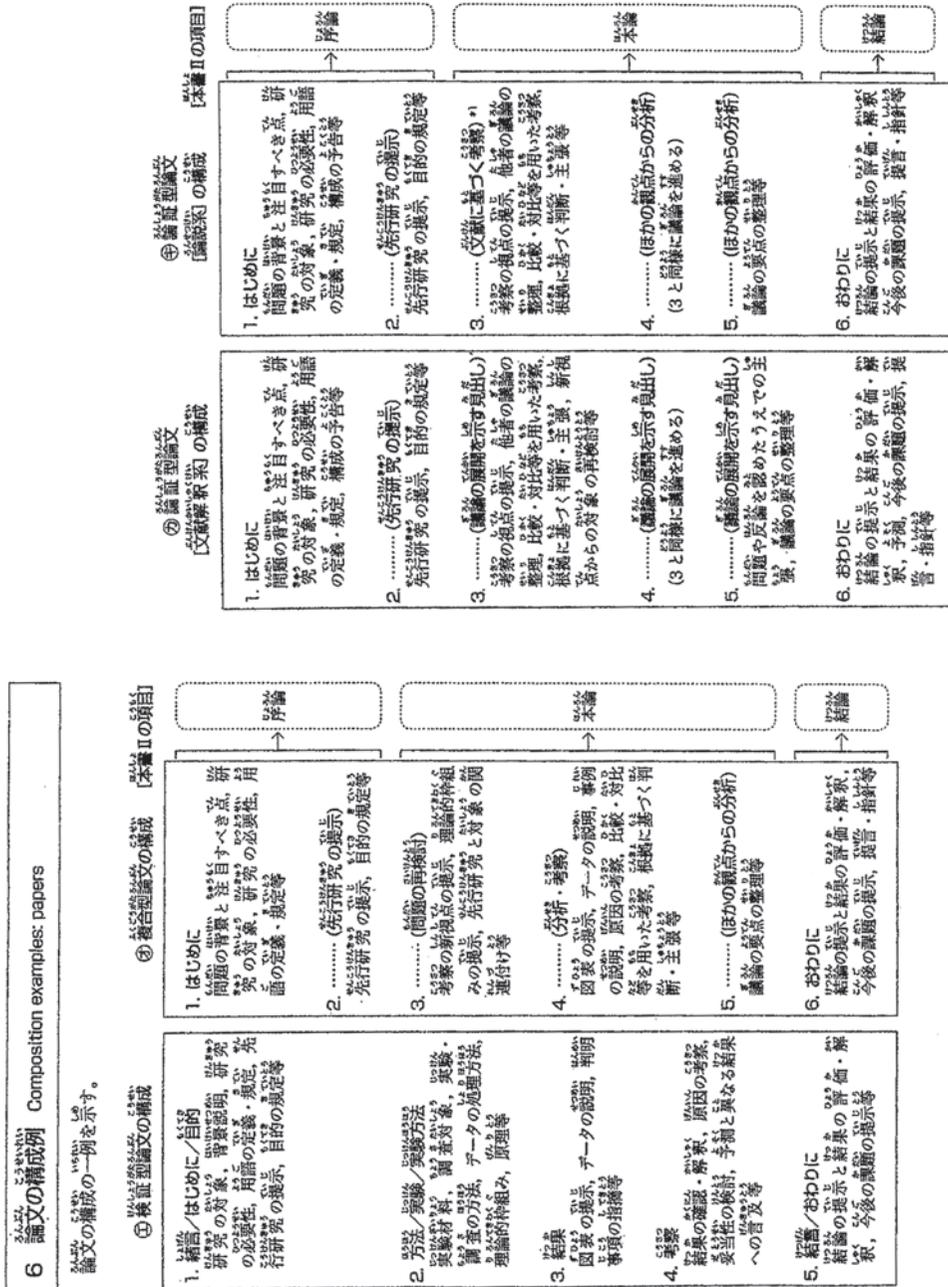
池田玲子・館岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門』ひつじ書房

泉忠司（2009）『論文&レポートの書き方』青春出版社

成田秀夫・大島弥生・中村博幸編（2014）『大学生の日本語リテラシーをいかに高めるか』
ひつじ書房

二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子（2009）『学生のためのレポート・
論文表現ハンドブック』東京大学出版会

資料 1 論文の構成例



二通信子他 (2009) 『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』 東京大学出版会 pp.9-10

